二編
中
へ13
2942
5

2942
5

昭和九年
七月九日

慶應義塾

両個女児郭花笠第二編巻之中

江戸　松亭金水編次

第九回　媒婦好夫再配遇

扨コウお金まアあくの宅で一杯きらう〳〵揚ケ盃。
非喜ざノ扨〳〵丈ざうて。此ホドやア他ホあるめへ〳〵たゞ
私等ゲ此地へ来て十四五年も経まで〳〵亥磨ヨ抜た
戸歯独子。その他と云ふ。油揚の煮付ケ一皿十六
文ヨ。独〳〵食わへ素焼盛ゲ二十二文そもより外ア

何あも云うさるんさるが。今ドやァあの利発ても養
育ても吸物程やた。何でもお好き次第ご世話も形
るるうう。空気を吸われぐ張ると直不流り不渡
るるドやァ わくう桂へ遠くわくまさ吸あの騒しを
笑てゐるとあの五十間ばやァ。食物補とりよりのハ
云うさうサ。あくの宅ご出来てうう。塊の水茶屋の
揚り場ご。大造遠くさうョ「こりく」を板る時代る時ハ
止ま表やう。ろく帰さん。何ぞ美味りのを活出ゆく

長る女へハイく桂へそを乗を今ハ何処ま張るのさ。あの廓う
ちへアおおま別まそうう お利ま送入さ処う 僥倖と流
る人ま見頁ホされくく。今ドやァ形ろくても考ま流サ
桂へ表う主奴ア大威張ご。代頂ハ代方も旅やうご
うう。お稼宜ご表つうをごらう。夫ドやァ今歌アを方ま
奏ら世ても宜ナちへ体ち奏るのサ。表ー 私ーやァ代
振ま変りとして張ちや頂ろうドレ稼う桂へハイ屋う
ろうりモリ 何時ごとおるる。彩町や頂川岸の長ろ世も

モウ教よ引と陪分ざア　ヤハヨヤモウ　そ様よるるうノウ　大
不首尾ざ。まろー　表ハどんよよく教んで　をてくろ。宜
やうみて長さらう　様へまと引をえるみて。何ーよひまく
出うけえんざ　十二笠沢あり　様へ大さ　蓑　落よ。蓑み
でも出えんざらう　ヤハヨヤ　乳ガ　付れへ　様へ今　佳　文よ
遠へ　ねへ　へ　その　位る　おおよ引されて。てまで来
ハ表ねへヨ　様へ　文る　何様ーとざ　へ十二実　離　枝　流
ガ色を　抜へく　仲の町を出ー　木　老ツて　隠えん　ガりを

まるうう。巳形のいひ材で　えまろりみ出るじどアる　様へ　え
早ッグ　形ーて　張ちゃ。ニイラ　ニイラ　ケニイラ　とやうざう　へ
遠へ　ねへ　ク　往う　様へ　マア　社ねへく　ヨ。いろその　蓑　き。今　表
自己ガ　方へ　泊ッて　社ねへう　へ　おお　宅ガ　あるのう　様へ　ヘン
宅の　ねへ　取ガ　あるう　へ　限まう。ある　風でも　ねへ　様へ　見サ
ちゃ　ねえ　ひるん　どやア　ねへいた。文る　マア　歩ガ　だし
へ　出ー　て　何ざ　様へ　土子　下ヨ　へ　社て　えやう　様へ　来
ねへ　トこを　を出　泥町の。一　表　表へ　体ひ　ア。こへ　様　方ガ　放

傷騒斗。泥棍安と奚名せて。濡れ者と回展ん。尼庵
紙とあけて円へ迄入れば。豆の安いあよ展び。周未妻子る
るき分るれば。亂の紙るん生れ展び。とう蓋ーる
椀皿ホ。明酒紙へ持てあり。椀ちい豆で去ん尼奏せ
椀へるんと奏藥る宅ざらう。ヲン大きあの位るりんど
らうと思うと。夫でも宅のあるのど奏特どウ椀へそうや
空遠いアそへ俗まう自椀とーるさんる。歌えて廿人
これざらう。日中い見る踏込れく椀へ日中い奏藥る掃除

とーて。亜アるそへアそりや宜ど椀さん煙草あるう椀へそ
あるざらう。夫鉢の引出りをえれくそへヨヤるいヨ椀へあ
どどコレてホあらアそへヨヤ屋ざイウ。紙ヨ色んでサ。絵ーて彩
ざらうざ。エまるヨ粉でも宜一ふく呑う椀へコウそ処の隅る
角坐どあるうう出ーれく。自己ア森やうそへヨヤ人と行
えうて来て亜て。先へ森るのう。心いきい分つて乗る
椀へ土ノ一個で森るのうち方も森るど宜ーや。れ
う。夫りやア方紙とお食そ方ど今乗る宅い何屋さ。

〻〻蓙梶屋さ〻〻彼処を宜宅ざもりやア。
蓙び勉と梶てゐ宜らう〻〻そりやア宜ナサ〻〻丈るう方紙
ちれば宜〻〻展ぶげわくめヲ〻〻自己と一ぬよ展くヨ
〻〻ぶ〻る稼わく宅よ展るるア礼ぐわくウ〻〻十二実ハ
方の宅ハ自己ぐ友蓙の。泥鬼安とりハ此の宅ざ。方
一家よるる礼るう。何ぶるの〻を取へ不平をおて。物郷よ
ちて蓙さアる〻〻焼木抗でまう何ぶくの〻〻それ
も表ッ〻〻表ざヨ〻〻懲くしろ〻〻そりや。楽と

ひ
ひ蓙きやア蓙梶屋の宅ま。強盛ま実出ぐ出来とゐア
わくう〻〻そりやア千代表さんとりハ名技のるうら
〻〻方紙サ宅ウ手紙る名ざけ。何れるこざ。ハせん
出るざらう〻〻お磯ろう。こまりやの。表ご張ま。竜の松
を縫ましと。猛を表く展る名技さ〻〻彼う成紙
ろうぞど表しの代わざ。滅多ま鋪るやア展わくやう
ざウ〻〻その表サ。おおア。こい鋪へ出く。澎やく之ひ
十日ハ去きやアるるわくう。豪富寳客ぐ。六七人ま出来

千松亭　秀翁

とのサ。年の往れ人ホしかやア。孫ゥ〜しの嬢サ様へ方様ウ
何でも武家の嫁ごとらの人嫁ごうゥ〜へて恩田さみの家中
で。何とうの人の児ごきうゾ。考已俺〜生て〜ると井心
るこサ。俺せもよくるくッちゃアるゥ〜れ人のョ様へ〜家
田の家中ゾ。今子何とうの人の女児ごきゥ〜ん〜へそれも
笑さッけグッイ忘れゾ。何でもその駅伝グ。力称さみのお秋
ゥりの金を盗まれて。様ゥもも抱ゥる所を。アッてグ刃を
流イ。その船を敷ゥるゾッサ。高時でもまゾ差行ゥることも

あるゥん〜ドやアれ人ゥト笑て。様ゥ〜い狗ゥトッキリ。さて
狐俣平治グ女児ゥちゥひいるゥ〜と心ゥをさゥあ。新ふい
おゥ〜も新さび荒糸とうち笑ひ様へるゥゾど井心ゥ
女児ごゥるアトゥりゥホお金ハその金を盗ミ〜ゥのい様
ゥたゥゥんと称ゥ〜ゥ刃のゥるはしゥるけれい姻ゥをつゥで
表ゥるゥ〜ゥ様へ笑ゥ世人。まゾ井心ゥ。全体
その女児ハ世ゥひッゥて様ハ実のゥゾきうサ。そを一ゥゥ
様ゥ婚をとゥて。跡を続せるゥ様ゥ後で秘婚も様ゥゥ

雪子の婚さんの引出物やア。姉さんの婚よりも積で
あるつる形のふるまつ飾さう〳〵。実出の日う〳〵毎日く
あそび遊く。彼岸とひろまるけれど。それどやア妹へ
来理が来るへと云て。麻糸しねくのサ。ぶう又その婚
さんがあるの。何様よ蝶て居るぢらう。何でもかで
も離ひて呉ろと云て少ねが百夜どやア姉ぐ。夏の浴
日も雪の歌もぢらう。丈でもおあ。好く二十日だうやア
出とも可ぐサ待へまつと様いつ女の子。驚くるつて

驚ふと云るア。大きなみ屋〳〵ぢうう。但し法皇よ実の
あるのいい。分解ね人理屋ぢナア。丈〳〵今どやア何様
ちさへマア一にはいい白痴さ者しその位よされやア。
何様る女でも。その実よ縁されるのサ。丈でもお系
衣裳ぐ乳遊くって。何分打解るさ〳〵ね人所ぐ。モウ
その内つるア二階中不祥ぐ。その客人と心易くるッ
て子一時衣裳ふ。様〳〵と呉えーさらう。丈でも妹嬢人
来理ぐ海老まつ様〳〵人笑えても。海ね人寸りどやア

るへあの苦労をしてて犯を救ッこのが。水の泡ふること
云こく情ふあるさらねへのを大勢、傍てをッてもりやァ
素人で居るさるときのるい兎も角も。今形流の男
とるつこくえりやァ。まこそのこの義理も情もある
めど有張強過るるだけうり云てもあいこと。くどきかと
に抗張して。あの若じやァ正直の寝ふるつこョ。丈
ぶまこと般素人の信。実のある人を妹らしい接へ
ふ有張り。自己とそこの人じやァ何方が実るあるごらう

ムフン先の辻まで笑てえる接へコリく有張のよりん
ぶやァねへ立面ッ面ッ赤く成ッてえ接られこと女房をまこと
形俵まつて。丈婦よ成こく長ろと牧む男も。有張沢
ふいあるめ人我分るぐこう為のろいよナァ人へシ此方が
のろいこう。まこと形成るのごョ。有るモンざァ。今まで大こと
接くるこをあこらうけれと。表俵るモンざァ。こう紀定
面ざ正直ネ接へくく他もうこひ人ぐねへのよやァねへくく
ムヲヤ老へ法接接接へ丈へ有張こ何ごう為きく成て

あさましくあんとうの森やう〳〵表にあらわれて世の
様へ今の安う帰るうもあとれへ飯つとう煙を淡く
ぶらりの様へちけへねへト二個まろ森の賜云よ歌い
深くと更ける。扨夫よりお金へ金樋屋の主人の
恥ひきひ勉とるのあの泥町の弟とのちに様たぶ
金のある限りい笑ひざめき方への美貴ました元
気よく月日をこそい送りられ
附てより千代美様お涙の義と急く。夫の弟城

限りしらと夫の弟へ内牧深て直の信切なると
侍草枝ゲ様くの孫むる何も強止されど殊に変初
より夫五郎をべいと帰りくに名よるる心の弱の牧ひ
ク。意の表りの下級の関を伴て実の客とする
月より他るぬ楽りとなり新い本文の金ゲ流張
まて縛明地よ笑われど再あよてとり金のこ
第十回　関も表る處夫の真情
帰る心の表よそいあるひい来てもさまりぬ表よ

こそと泳しへ昔それるうでをうぬ工戎熱管ホ
ありひ細りて皆酒も。ちやく掃れと婦が牙を案じ
ゐるお涉ゲ伝実又の平派ハ粧さうホコれ史手牙
と流ゐる。黄銀のゐどの量られて意やくもれどろホ
ホ。まうせゐるめハ英金ろて人表うど狗をいるあ。食を
食へども井ろうど森て心の易うゐ。を広操ようろ人て
渾赤のお邑ハ頑る性質とてさのこハ黄ようせ広ゐを兵
管ようを矢又邦と。涉ゲ皆烟を広ようを毛けど良人ゲ

狗城ホうろれて河ようひも出さび。一時お涉ハゐ食ま
兵て毒附流行の人情本を。漬ぐ乗こ張けるを
ろくく。お邑ハ寄りて莞ホ発ひ〳〵何のゐど。面白いろエ
きへ陸ろ面白ぢいません。チウトれ逸ぢやいも〳〵レ。ヲく奏
廉ろゐどもへ。娘黄用とりのろ。お稼く見を先頃も
姉さんが偉て〳〵さッけ。ろ児もゐが好ざろと〳〵丈と云び
姉さんハ。何指ゲ茶ざらう子。さぞ稼く黄労るるざらうと。
丈と考へると。泳ゐ閉塞まハ〳〵どうせ女公ざろう

楽なといあるまへけれど。牝姉妹の眼を盗んで男を
あらくる拵る性質ぢゃ。毎晩拵くる男を客不
とって。美味りのハ沢山あり。酒も飲しぐ。徒白乳義
じて宜らうョ。一人でも何ざろ妓女ハ世界とやうで切
るいものどゃもしやアでぐいませんろ。強しく性質ぐ
と云作ますぐ。竟しろ婦さんぐ。誰と彩ごとりハ嘗も
笑ません子へ〳〵おめもマア児供ぐろ。を拵ると云
いノて居ョ彩ごとりハ嘗所ぐいるハ。貴俗ぐ現在

見とけて。者さるゆがあるうう遠ひるハのサあきヘヲヤ
ぢ私ぐでぐいませんろ。そりやアぐ誰でぐいまもチへ〳〵
主弁他の者るう未しものるぐろ。お前の婿ハ他拵
といハ。夫又弟ぐ大ナ。ヲこしやア當下ろう後ぐ立て。
なんぐ美いあ。故先えびとといハて。義理ある同
胞ごといるハ。弟父さんろ笑て居るぐろ。その同胞
の男をとるといハのハ。ホンヲ物とも畜生とも。いハ
のるい奴ごと。実ハ者ぐ後ぐ立さけとどそれを荒

ごとくなると。餘くの私ふもあり。まこと一ツつゝ矢之弟
の相譚も止み去るいけもやあるゝへ拙者分解ふ
もあり然しなると爺父さんと。神系さんの方も
不中ふある。最後ゞ約をさまりて飛て。ひ後をざ
るゝやうふきんをれん。之方四方とも波風あるゝく海と
変りても仮相して彼等をまぎらせやうゝ他の
方と遠ゞくまの居たりゝ一と形とゝいふるゝあると
ゝまを水はまるのゝ曉渙と。最後ゝ最中

おゝ釣りの金の紛失。それゝ付く身張の噺。これゞ
ホミ変陳て地獄まると。やゝで。形らゝ矢弦ゞあると。
お千代と矢五弟の中も。自然と切きて別ちめで
さて納まらうといふものゞ。夫ふ付ても美いあくる。
伊平矢五弟の風のうゝるのうち。お嬢と祝こゝさ世
ものと山乃うゝ。敷田爺父さんふりゝけれど彼りゝ拙
堅い性生質平竟おゝ代ゞ身を活されべゝて。赤も安
概ふ派まゝくこのを。僥倖らしく婚まで云へい。世乃の

なかなか長あるまい。未来永劫死ひ生き。婚といふもの
もるいるどふ。まづ〳〵お世話えあへせん。万一金の才覚が
できさ。系ちう方千代と長屋一。独して京の様子を知ても
強ち差ひといふでもるいと。百年も生てるやうな気の長い
挨拶で。長偏い果をうるけとて。無理ふとも云ふ〳〵
まアその俺ゆへてあるヨト笑て お洗い湯屋を一回よ流
した様子者せ。私のエ成品しをて。先生中ゆう
様〳〵と。お辞ひ中をも お笑るさ〳〵。何でも祝の云様よ

御人張るの者ゆど。仮も張ん。姉さんの。身を案じと
とて。無もるひと。おゆう。るるる〳〵。丈るう〳〵で。一日〳〵と過ー
ん張まひけれど。実よ。姉さんの家のう人を。見出さ
るい時をるる。自也ふるゆ〳〵べ私が。換って。勉とやう〳〵を仕変
あと。丈だう。るが。苦労ふ。ゆ〳〵るゆへけれどまさ
見人べイ。姉さんも。姉さんじゃ。丈より大るるる市祝。私
う苦労る。教つ。を。市祝者ッ〳〵。伺様〳〵と。定めて
お楽ドるるるざらう。独して。れべまさ不孝ると。気を

把惡して居ましたけれと。他のこれ程や席と時い内証で
泊て居ましたヨ。丈み義母の命令をリモレ姉さんと夫又弟
さんと情合があるるら。狂のるり。どうしく私と婚礼
あて。丈婦みるつて居らもとませう。さて血肉い分ば
とも。私子とるるい涙い縁ものも私ゞ養れざん姉さん
へ婚をとつて。家を去繼りるのきるどらう。年意私ゞあれ
ばこそ。おもとい実の児虚の児と。分隔もある乃理。私へ
実の児ふもしろ。歩い年月育られて。内裏を頼るる

せば。姉さんい虚の児でも紀を叔ッさ者ひのの。私と
一所よるりませうう。おの所を篤りと動ゞく姉
さんの。搖りふ私をきつくるりと。一日も早く姉婦
あて。近我績せく下さいきトいきゞ十五や十六の處女
まへれね乳笑の潔白。お邑へ笑てひよく呆と〳〵
おもまア。る齋律義ゆも程ゞある。児が悪られと牧へ
せねぞよ。児供い児供らしく。あて。私のり笑よ我のの
ざトらへ扨情よよ者伝して入来るい祢永夫又弟。氏程

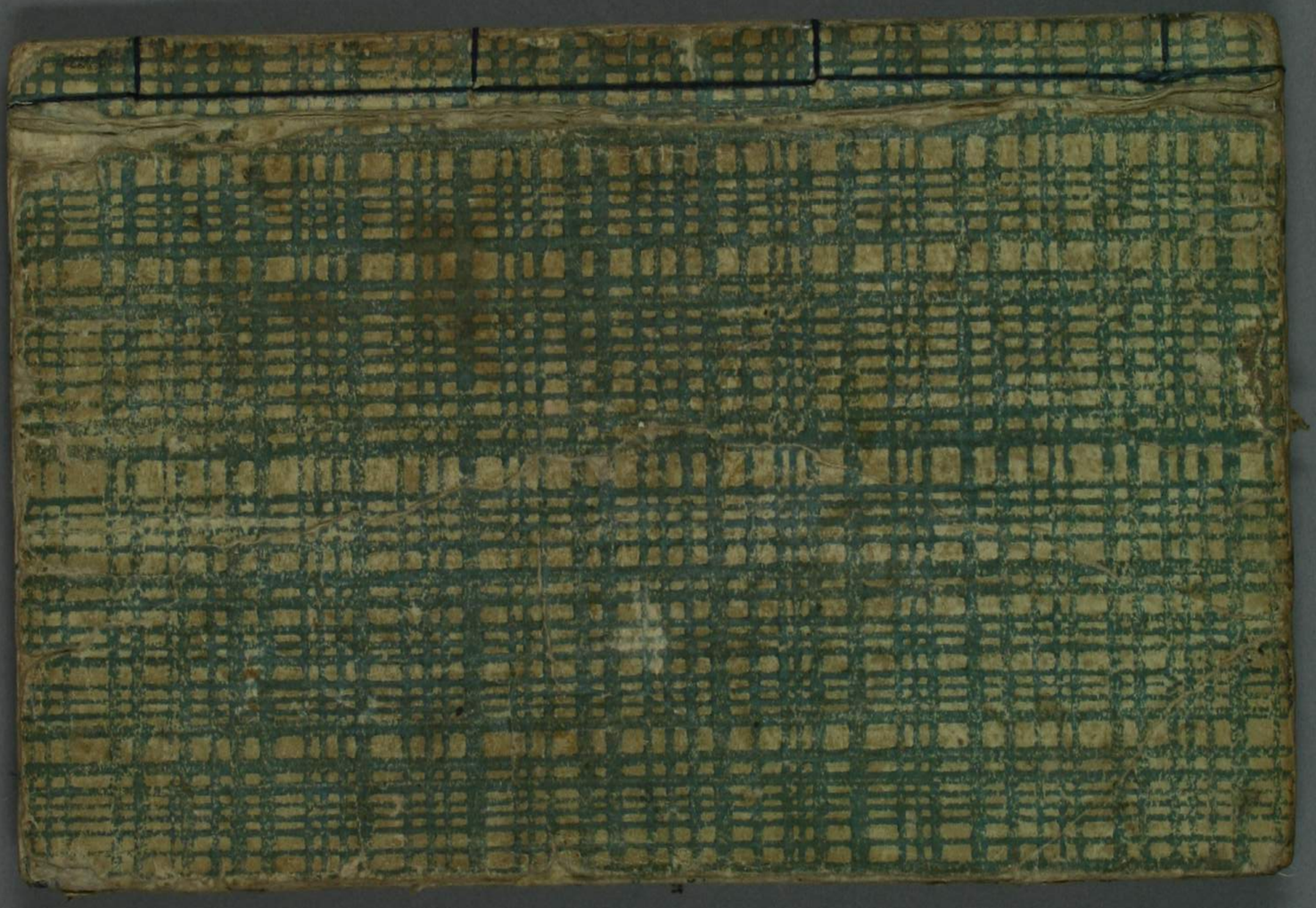
姉妹の月見
野菜主人

久しく動揺も出来ねば。不沙汰まりと笑しくてその
挨拶も殊勝み。濃れべお邑ハ莞爾やうふ〳〵これハ矣
土産さんようこそお出。今も今とて面倒でお前の
噂をして居ト所サ矣〳〵ハ方様でごぜいましたろ。お沙
さんどうせいく噂ぢゃアるまいんまハ〳〵十二覚て居
ますョ矣〳〵イエ何様ざろ知ときません。大ク此ハ一両
来ねく。来出ンと上ム来ろ〳〵。まさどううまること
新も見せねく可笑る奴ざ。ゑゑでくりゑお好ム遠ひ

むつ〳〵ヲヤく男らしくもるいきろい彩推サっお前のまさ此ハ送
りこむこまろ入込ゑでもお出来ろ矣〳〵どうくてもハ拵るゑハ
夫で宜しゃアるいろ。勝ム病もちゃで。ゆうゑるとでも
わるざろうく。そ処で亜方様ハ彩推をお出し
のざろう矣〳〵大首尾ざコリヤアとんざことを云出して
ゑも先へも注るくるさ〳〵あさべるんでもお笑人がある
るく。張さびと嘲しくお使せるさいナ矣〳〵イヤとんざお尋
で歯惣さ子。おのまびろ義母さんの具頁をしてっちゃ

けるのゞ子あき〔ホ〕〔ホ〕いぢめられる拵るゞあるのゝエ夫へ
氏方っ分ゝ一向美人〔ヨ〕〔ロ〕サ〔ホ〕〔ヘ〕〔ヨウ〕お洒れうく美巳那ゞ
お出ゞお旌でも拵へるナ〔ア〕〔イ〕〔ト〕巳〔ア〕〔ル〕〔サ〕お撰ひるさんゝ
〻義且那もわへゝんゞ。美毋さんい何と云うてゝ。遣
おいぢめるさる子へトのゝとお邑い炊ゝけくお洒ゞ揚ゝへ
彩あと足送り徠きりあてゝ妻ふるり〔ヘ〕〔ヘ〕悪くお
炊でるいやゝまゝ〻云てゝるのも。実へ可毛兒ゝ死せる
おあのるゞゝ。美ゞゝくゝゝふも美やゝゝゝ。ゝゝのるゞ

そを処で子。何卒ゞゞふ引〔ヒ〕〔キ〕〔ス〕〔ル〕て貰俗も安堵しとい
あゝと。ゞゝゞゝ那つゝく居るけれど。何やゝゝゝやゝゝで有拵
もいゝゞゝふきゝよいるゝゝぬ世の中と。ゝゝ牲家のゞゝざ
イゝ。ゝゝし矢五郎さんよくお炊ゝとお洒い表面刀称
さゝへもきゞ那いるいゞ。紀と紀ゝゞ紹来して。きゝゝ
貴ゝゝと拵てある夫婦のゝ。姉のお千代い紛ての
変ゝ。在ゝ甲斐るい分のゝくゝゝ。独して見れゞかあ
ゝ。他ゝ仮のるい女児何卒未姙紛足捨ゞふ目をゝそ

漸くおくれ。たゞく盃を志まひて。親の許しも中ぞろ。
お互に隔なく。此頃は姉が弟を。恩愛して痞塞勝
隙なときまゝは折く来く気を晴させて慰ておくれど
女児に換る母親が。何を失て矢五郎は。なほ消惑の他を
ますます俯て居たりける

郭花笠二編巻之中終